

7. 助監督 —1963～64年—

清水監督と国分部長

昭和37年(1962年)の秋のシーズンが終わった直後、渡辺監督から「監督を辞したい。そこでお前を後任として推薦した」との話を受けた。晴天の霹靂であった。大学院修士2年に在学中であり、博士課程への進学が既に決まっていた頃である。親しくしていた与謝野馨主務に相談した。私は野球そのものについては多少自信もあるが、それ以外のことには全く自信がない。これで監督が勤まるだろうか。彼は、「そんなことは誰も岡村さんに期待していませんよ」とあっさりと言ってくれた。その一言で、それもそうだと監督を引き受ける決心をし、恐る恐る指導教官の国分正胤先生に申し出た。監督をやる以上は3年間で博士課程を修了できるとは思っていませんということを付け加えて。先生はすぐに良いと言ってはくれなかった。

その辺の事情を察して、清水健太郎野球部長(当時脳外科の大家として医学部教授をされていた往年の名捕手)が上原隆主務を連れて、国分先生の研究室に来られた。国分先生は、学生の私を守るために、助監督であれば良いという条件を出された。清水先生は、直ちに名目上監督になることをお引き受けになる。そして、国分先生に野球部長になることを要請されたのである。国分先生もやむを得ず、部長を引き受けられることになった。それ以来、東大野球部は先生にお世話になり続けることになる。清水監督はもちろん練習には来られない。

そして、昭和38年春の開幕を迎えた。対慶大1回戦である。その日、清水監督はユニフォーム姿でベンチに入られた。何十年ぶりかのベンチ入りであった。指揮は私がとる。どのような状況かは憶えていないが、清水監督はバントをするのが良いと囁かれた。私はそれを無視したように記憶している。試合後、監督はそのことについて何もおっしゃられなかった。記録によれば、その試合は9回に1点を取られ、3対2で負けている。上原隆主務は、「清水先生がベンチに入るのをやめてもらいましょうか」と言った。どう話をつけたかは知らないが、以後先生はベンチに入られることはなかった。日本経済新聞に次のような記事がでていた。

脳細胞の権威として知られている東大の清水健太郎氏は、昭和2年いらい実に36年ぶりに新調のユニホーム姿でベンチに入った。『久しぶりに、ユニホームを着たが軽くて気持ちがいい。名ばかりの監督だから、試合は岡村君にまかせた』とベンチの中でのんびり観戦していた。試合後、監督をつかまえると、バツが悪そうに『たまに握ったバットが重くてネ、それもノックバットですよ』と試合のことはいっさいふれず、最後までユーモアたっぷりの医博監督だった。

昭和38年度のチーム

渡辺前監督が私に残してくれたこの年のチームは、今年のチームから2番打者の天野右翼手と4番打者の佐藤捕手とが抜けただけであり、好守にバランスがとれた良いチームといえ、多くの先輩方の期待も高かった。オープン戦では、東都六大学の各チームと戦って、互角の成績を残し、私達が選手頃は、ほとんど勝てなかったことと比べても、このチームの充実ぶりを表していた。3年生の新治

伸治投手が大黒柱に成長し、4年生の長田仁雄投手は無類のコントロールで安定した投球を期待できた。中心打者の杉山守久主将は2シーズン連続で3割5分以上の高打率をあげ、東京六大学を代表する打者となっていた。遠藤正武副将も杉山選手に負けないまでの打力を身につけていた。玉木武至遊撃手と杉本聡二塁手は共に2年間レギュラーとして活躍しており、守備の要として信頼できる好選手であった。唯一の問題である捕手についても、強肩でリードも繊細な岡田一雄捕手は投手陣が安心して投げられるまでに成長していた。

選手達には、打撃中心に練習をし、もう一段の打力アップを図ることを提案した。守りはバッテリーに任せ、他の選手はひたすら打撃の向上を目指すべきであると。守備については時間をかけて練習しなくとも、最低限のことは出来ると考えていたからである。これに対する中心選手達の反応は、多くの先輩方と同じく、「守備を固め、最小得点を守って勝つ」ことが我々として採るべき道であるというものであった。守備は練習すれば誰でも上手くなるが、打撃は天性のものがあ、練習をしても限界があるというのがその理由である。中心選手達の年齢は、私と同じか、せいぜい2~3歳しか違わなかった。それに、野球は選手がするべきものである。私は自分の考えを押しつけることはできなかった。このことを後々まで後悔することになる。

勝点の取れるチームであった。「1回戦は安定性のある長田投手が先発し、リードをすれば新治投手をつぎ込んで、そのリードを守る。リードできなければ、そのまま長田投手が完投する。いずれにしても、2回戦は新治投手の完投に期待する」ことを基本方針とした。そして、このことを、選手にも徹底しておいた。この方法で、勝点の1つか2つはとれると踏んでいたのである。

昭和38年度の成績

春季リーグ開幕第一戦の対慶大戦は、予定どおりに長田投手が先発した。飛田さんの評によれば、「長田はわずかに3回であったが実に巧みなピッチングをした。球は速くはないが、配合がよく、慶応の好打者をとにかく沈黙させた。この好投にこたえるように東大の攻撃も好調で、1・2回遠藤の強打と杉本の上手な軽打によって各1点ずつを挙げ、見事2点をリードした。2点を先取された慶応は4回長田のコーナーをつく球をよく選び(1死より連続四球)、捕手の逸球に乗りチャンスをつくり、東大は新治に救援させたが抑えきれずに、この回2点を返されて面白い試合となった。5回から得点なく、同点のまま9回を迎えて延長試合にはいるとかと思われたが、9回の裏を攻めた慶応は一塁手が塁を踏み損ねた失策に1死にしてランナーを出し、浜村の右翼線二塁打にとどめを刺し、東大の惜敗に終わった」とある。投手の交代時機を間違えたかもしれない。2回戦も、長田、新治のリレーで失点は4点にとどめたが、攻撃陣が振るわず、完封されてしまう。

対明大1回戦は、基本方針とは早くも異なり、新治投手を先発させて、完投による4対2の敗戦であった。逆に、2回戦は長田投手が先発して、3回表を終わって4対0とリードした。しかし、3回の裏に3点、5回に2点を失い、この試合も終わってみれば、5対4の惜敗であった。新治投手をどこで出したかは記憶にないが、少なくともリードしている段階で登板したはずである。1回戦に完投負けしている投手を2回戦に登板させるというのは、あまり感心した采配ではない。何かちぐはぐであった。

次の早大1回戦も、長田、新治のリレーで1対0の惜敗に終わる。そして、2回戦は、新治投手が予定どおり完投した。しかし、延長13回を投げた末の0対0の引き分けである。ここまで6試合を戦

って、1点差負けが3試合、2点差負けが1試合、そして引き分けが1試合である。どこかおかしい。監督さえ良ければ、少なくとも2つは勝っているはずであった。長田投手が投げると得点はあげられるが、新治投手が出るとまったく点を取ってくれない。このことは、私の予想を越えるものであった。どうしてよいか分からなかった。そこで、精神主義に陥る。そして、それが悪循環をもたらすのである。

その後も、新治投手が先発した試合は、法大2回戦1対1の引き分け、立大2回戦1対0の敗戦と、味方はまったく点を取ってくれなかったのである。ついに、1勝もできずにこのシーズンを終えた。後半の8試合は合計5点しか得点できずに終わったのである。点を取らなければ、勝てないのは当然のことである。

秋になって、状況は一層悪くなった。慶大戦、法大戦をいずれも大敗して連敗。そして、早大戦にも連敗。しかし、その2回戦は、久しぶりに1点を先取し、2対1の惜敗であった。続く立大1回戦が監督としての初勝利となった。新治投手の完投で、7対2の完勝であった。翌日の試合を引き分けたのが悪く、3・4戦を連敗。対明大戦にも連敗して、このシーズンも勝ち点をとれず、最下位に終わった。

夏の遠征

夏には遠征して10試合ほど練習試合をするのが常であった。このチームは、久しぶりに九州で行われる七帝戦に出場することにし、その後実業団のチームと数試合することとした。相手側と交渉して、日程を組むのも主務の仕事である。七帝戦は当然優勝するものとして、日程は組まれていた。私もそれに何の疑いも持っていなかった。私は同道できないので、監督を上原主務に頼んだ。ただし、試合の出場メンバーの選定だけは杉山主将の権限とした。

七帝戦の1回戦にはどうにか勝つことができたが、その2回戦は終盤までリードされて全員青くなったそうである。その試合を落とすと、次の試合までの2日間、何もすることがなくなる。私になんと言われるか分からない。必死になって戦ったそうである。ようやく逆転に成功し、次の日も試合ができることになり、全員ホットしたと、後に何度も聞かされることになった。ともかく優勝することができ、その遠征も無事終わった。選手達には、一生忘れられない思い出となったようである。

新治投手 - 昭和39年 -

長田投手が卒業し、その後の投手がまだ育っていなかったので、昭和39年のシーズン、投手は新治ひとりという状況となった。春季リーグ開幕戦にその新治投手が法大を完封して、幸先よいスタートを切った。翌日もまたその翌日も新治投手の完投である。そして、3対1、2対0と連敗した。さすがの彼も疲れがたまったのか、次の慶大戦には全く精彩がなかった。3日連投の悪影響がでるのは当然のことと今では思う。

1週置いた早大戦には、また好投してくれた。1回戦は、延長15回を投げて、2対2の引き分け、一日置いた3回戦には、完投しての2対0の敗戦であった。

最終戦の対明大戦も新治投手の3連投となった。1回戦3対2の勝ち、2回戦3対0の負け、3回戦2対1の負けであった。このシーズンの新治投手は、12試合のうち11試合に先発し、8完投とほとんど一人で投げている。今考えると、彼の体にとって極めて過酷なことを監督として強要したことが

よく分かる。しかし、当時はそれほどは思っていなかった。私も似た経験をしていたが、私よりもはるかに体格の優れた新治投手であれば、それに耐えられると考えていたようである。

秋のシーズンは、井手投手の台頭もあって、春ほどは酷使しなくて済んだようである。記録によれば、新治投手は7試合に先発し、完投は4である。完投した4試合の成績は、3対2(早大)、5対1(立大)、3対1(明大)、3対2(法大)であって、いずれも惜敗であった。

プロ野球選手

助監督時代の選手の中から、2人のプロ野球選手が誕生している。新治伸治投手と井手峻投手である。助監督に就任した年の入学生の中に井手選手がいた。新治投手が3年生となり、エースとして活躍していた頃である。グラウンドでの井手選手のプレーを見た時に、その運動能力の高さ、クラブさばきの軽快さ、そして何よりもセンスの良さに強く惹きつけられた。早速、杉山主将と上原主務に対して、井手、片山、中野の3人は将来の中心選手に育てて貰わなければならないので、すぐに入寮させて欲しいと申し入れた。片山直久と中野忠夫の両君は、高校野球の名門土佐高校および甲陽高校の出身であって、野球についての基礎的な訓練は十分にできており、誰が見ても納得できる人選である。一方、井手選手は、野球では無名の新宿高校出身であり、プレーが素人っぽかった。片山、中野は分かるが、井手はなぜ選んだのですかというのが彼等の疑問であった。一目見れば明らかではないかと答える以外に当時の私には説明のしようがなかった。二人は私の提案を了解して、この3人を入寮させてくれた。彼等は、ちょうど私達の時の片桐、古舘と私の3人と同様に、後に主将、副将および主戦投手となり、私の期待に応えてくれた。

春のリーグ戦終了後に行われた新人戦には、片山二塁手、中野三塁手とともに、遊撃手として活躍し、井手選手の素晴らしさはすべての上級生の認めるところとなった。この頃の新人戦は、リーグ戦形式で行われ、1チームが5試合戦うことになっていた。投手陣があまりにもひどく、大敗続きで新人戦は終わった。投手が悪ければ、たとえ良い内野手が揃っていても、試合には勝てないことは明らかであった。翌年主将となる広瀬紀男君が、彼等の学年の総意だといって、「井手を投手にしてくれませんか」と私のところに頼みにきた。東大史上最高のショートストップとなることは私には保証できる。投手となると未知数であるが、彼のバネと肩の強さがあれば、東大を背負って立つ投手位にはなる。それよりも他には候補が全くいなかった。承知するしかなかった。ただし、練習方法に一つだけ注文をつけた。一度に投げる投球数を少なくし、練習では必ず全力投球することを約束してもらった。彼の才能は球の切れにあって、絶妙のコントロールではないと考えていたからである。

彼を育てるために、私も相当に気をつかった。最初は短いインニングしか投げさせないことにした。1年生秋の開幕戦対慶大1回戦、10対0で負けている8回裏が彼の初登板であった。痛烈なヒットを数本続けてあび、2点をとられてた。翌週の対法大1回戦も、全く同じ経過であった。その後、最後の対明大1回戦までは、登板していない。その試合は、最後の1インニングを0点に抑えている。

2年生となった春のシーズンは1試合のみの登板であった。その頃には、ようやく投手としての力がついてきていた。そこで、夏に行われた京大戦は彼に任せることにした。見事に完封して私の期待に応えてくれた。特に、0対0の9回無死満塁から3者を三振にとってピンチを逃れたシーンは未だに記憶に残っている。秋のリーグ戦には、新治投手を救援した2試合は最後まで投げきってくれるようになっていた。そして、初先発の対慶大戦には完投し、4点に抑えた。新治投手が卒業した3年以

降は、文字どおりのエースとして活躍した。それが認められ、新治投手に次ぐ2人目の東大からのプロ野球選手として、中日球団に入団することになったのである。

新治伸治投手は、私が卒業すると同時に、東大野球部に入ってきた。その頃は、私もよく本郷の東大グラウンドに顔をだしていた。身長がゆうに180 cmを越える長身かつがっちりとした体格は、ひときわ目立つ存在だった。上手から投げ下ろす速球は自然に変化して威力があり、秋の第1戦には早くも登板し、次の試合には明大を完封して、この学年に初勝利をもたらした。その後も毎試合に登板し、最後の立大戦にはまたも完封勝ちを飾り、投手難であった東大の救世主となったのである。

しかし、不幸にも翌シーズンが始まる直前の練習で、ボールが眼に当たるというアクシデントに会い、シーズン前半は登板ができなかった。しかし、復帰第一戦の対慶大戦に1対0で完封勝ち、その後もさらに2勝を加え、2年生の春季リーグ戦終了時点で既に5勝を挙げたのである。しかも、最初の3勝はいずれも完封勝利であった。私の場合は、この時点では3勝にすぎず、しかもいずれも打線の援護によるものであって、完封勝ちが4年生になるまで一度もない。その差は歴然としている。

自らのフォームを少しずつ改善して、2年生の後半には既に完璧なものにしていた。スピードは豊かな上に、コントロールも完全であった。彼は極めて真面目な性格であり、相手打者を良く研究し、打者の構えによって、その弱点を見抜いていた。私とは、すべての点で逆のタイプの投手であった。しかし、何事も長所と短所とは隣り合わせにある。球の回転が良くなることによって、自然に変化していた速球が一定の球質となる。コントロールが良くなることによって打者が抱いていた死球の恐怖感が取り除かれる。狙ったところに投げられることは、勘の良い打者にとっては、その予測が当たりやすくなるということでもある。

2年生の後半以降、勝ち星にあまり恵まれなかったのは、彼が登板すると打線が沈黙してしまうという不運に見舞われたことが大きい。案外彼の長所を相手に逆用されたことに一つの原因があるかもしれない。いずれにしても、東大野球部が生んだ最高の投手であることは間違いなく、プロ野球入り第1号となったのである。

監督しての心得

助監督としての2年間の成績は、3勝40敗で勝ち点は0である。この成績は、その前の2年間の成績、5勝40敗よりもさらに悪い。チーム力をはるかに上であったのに、このような成績しか挙げられなかったのは、監督が未熟だったからである。このことは、自分自身がもう一度監督をした後でより鮮明となる。

野球の監督は絶大な権限を持っている。まず、練習日と練習時間を決めることができる。監督が練習を休みにすれば選手は自由になるが、練習をする限り、それが試験中であっても、また夏休み中であっても、選手は時間的束縛を受ける。次に、練習方法を決めることができる。これによって、選手を上手くすることも、体力を消耗させるのみとする 것도可能である。この時期の私は後者であったと思わざるを得ない。試合に出場する9人とその打順をも決めることができる。完全な人事権を持っているのである。さらに、試合中にはサインを出し、選手の行為を制約できる。

私の場合、助監督として、次から次へと、未経験の新しい状況に直面した。それを吸収しながら、日々進歩してきた。これが良くなかったのである。絶大な権限を持っている者の言うことが時期によって異なることになるからである。選手は監督の言が以前のものとは異なることに戸惑ってしまい、

精神的にも不安定となりがちである。監督たるものは、一度言ったことは、間違っていると思ってもそれを貫かなければならない。そして、あまりにもそれが多くなるとやめるしかない。監督が変われば、方針が変わっても全く問題はないのである。

リーグ戦の記録 - 昭和38~39年 -

助監督時代の2年間

昭和38年春	0勝10敗2分、勝点0	(慶、法、立、明、早、東)
昭和38年秋	1勝10敗1分、勝点0	(法、慶、立、明、早、東)
昭和39年春	2勝10敗1分、勝点0	(早、慶、立、明、法、東)
昭和38年秋	0勝10敗0分、勝点0	(慶、早、明、法、立、東)
合計	3勝40敗4分、勝点0	

助監督就任直前の2年間

昭和36年春	0勝10敗、勝点0	(明、慶、法、早、立、東)
昭和36年秋	2勝10敗、勝点0	(法、立、慶、早、明、東)
昭和37年春	3勝10敗、勝点0	(法、立、慶、早、明、東)
昭和37年秋	0勝10敗、勝点0	(慶、明、法、立、早、東)
合計	5勝40敗、勝点0	

昭和38年春季リーグ戦

対慶應1回戦 (長田、新治)		2回戦 (長田、新治)	
慶大	0 0 0 2 0 0 0 0 1 3	東大	0 0 0 0 0 0 0 0 0
東大	1 1 0 0 0 0 0 0 0 2	慶大	0 2 0 0 0 1 0 1 X 4
対明治1回戦 (新治)		2回戦 (長田、新治)	
明大	0 2 1 1 0 0 0 0 0 4	東大	0 3 1 0 0 0 0 0 0 4
東大	1 0 0 0 0 0 1 0 0 2	明大	0 0 3 0 2 0 0 1 X 5
対早稲田1回戦 (長田、新治)		2回戦 (新治)	
東大	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0	早大	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
早大	0 0 0 1 0 0 0 0 X 1	東大	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
3回戦 (新治)			
東大	0 1 0 0 0 0 0 0 0 1		
早大	0 2 1 0 2 0 0 0 X 5		
対法政1回戦 (長田、元久)		2回戦 (新治)	
東大	0 0 0 0 0 1 0 1 0 2	法大	0 0 1 0 0 0 0 0 0 0 0 1
法大	2 2 5 0 0 0 1 0 X 10	東大	0 0 1 0 0 0 0 0 0 0 0 1
3回戦 (長田、元久)			
東大	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0		
法大	0 0 3 0 0 0 2 0 X 5		
対立教1回戦 (長田)		2回戦 (新治)	
東大	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0	立大	0 0 0 0 0 0 0 0 1 1
立大	0 5 1 0 0 0 0 0 X 6	東大	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

昭和 38 年秋季リーグ戦

対慶應 1 回戦 (新治、長田、元久、井手)	2 回戦 (長田)
東大 0 0 0 0 0 0 1 1	慶大 0 2 0 2 0 1 6 0 2 1 3
慶大 1 0 0 0 4 4 1 2 X 1 2	東大 1 0 0 0 0 0 0 0 0 1
対法政 1 回戦 (長田、奈良、元久、井手)	2 回戦 (元久、長田)
東大 0 0 1 1 0 0 0 0 2	法大 0 0 0 0 3 0 0 3 0 6
法大 4 0 3 0 1 1 0 2 X 1 1	東大 0 0 0 0 0 1 0 0 0 1
対早稲田 1 回戦 (新治、長田)	2 回戦 (新治)
東大 0 0 0 0 0 0 0 0 0	早大 0 0 0 0 2 0 0 0 0 2
早大 0 0 0 0 3 0 0 5 X 8	東大 0 1 0 0 0 0 0 0 0 1
対立教 1 回戦 (新治)	2 回戦 (新治)
東大 0 2 0 0 3 2 0 0 0 7	立大 1 1 0 0 0 0 0 0 0 0 0 2
立大 1 0 0 0 0 0 0 0 1 2	東大 0 1 0 0 0 0 0 0 1 0 0 0 2
3 回戦 (新治、長田)	4 回戦 (新治)
東大 0 0 0 0 0 0 0 0 0	立大 1 3 0 0 1 0 0 1 0 6
立大 1 0 0 0 0 0 3 1 X 5	東大 0 0 0 1 0 0 0 0 0 1
対明治 1 回戦 (新治、元久、奈良、井手)	2 回戦 (新治)
東大 0 0 0 0 0 0 0 0 0	明大 0 0 0 4 0 0 0 0 0 4
明大 0 0 0 7 0 3 0 0 X 1 0	東大 1 0 0 0 0 0 0 1 0 2

昭和 39 年春季リーグ戦

対法政 1 回戦 (新治)	2 回戦 (新治)
東大 0 0 0 1 1 0 0 0 0 2	法大 2 0 0 0 0 0 0 1 0 3
法大 0 0 0 0 0 0 0 0 0	東大 0 0 0 0 0 0 1 0 0 1
3 回戦 (新治)	
東大 0 0 0 0 0 0 0 0 0	
法大 2 0 0 0 0 0 0 X 2	
対慶應 1 回戦 (新治、奈良、元久)	2 回戦 (新治、元久、井手)
慶大 1 1 0 0 1 0 0 0 3 6	東大 0 0 0 2 0 0 0 1 0 3
東大 0 0 0 0 0 0 0 0 2 2	慶大 3 0 3 0 0 0 2 0 X 8
対早稲田 1 回戦 (新治)	2 回戦 (井手、元久、奈良)
東大 0 0 0 0 0 0 0 0 2 0 0 0 0 0 2	早大 4 0 1 0 0 0 0 2 0 7
早大 1 1 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 2	東大 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 1
3 回戦 (新治)	
東大 0 0 0 0 0 0 0 0 0	
早大 0 1 0 0 0 0 1 0 X 2	
対立教 1 回戦 (新治、元久)	2 回戦 (新治)
立大 0 0 4 0 0 4 0 1 0 9	東大 0 0 0 1 0 0 0 0 0 1
東大 0 0 0 1 0 0 0 0 0 1	立大 0 0 1 0 2 0 0 0 X 3
対明治 1 回戦 (新治)	2 回戦 (新治、元久)
東大 0 0 0 0 1 2 0 0 0 3	明大 2 0 0 0 0 1 0 0 0 3
明大 0 0 0 0 0 0 1 0 1 2	東大 0 0 0 0 0 0 0 0 0 1

3回戦 (新治)

東大	000	000	010	1
明大	000	002	00X	2

昭和39年秋季リーグ戦

対早稲田1回戦 (新治)

東大	000	110	000	2
早大	000	000	111	3

2回戦 (柳町、井手、新治、元久、安月)

早大	010	001	050	7
東大	000	000	000	0

対立教1回戦 (新治)

立大	000	100	400	5
東大	100	000	000	1

2回戦 (新治、井手)

東大	000	000	000	0
立大	103	000	10X	5

対慶應1回戦 (新治、井手)

東大	001	000	000	1
慶大	000	020	00X	2

2回戦 (井手)

慶大	020	010	100	4
東大	000	000	000	0

対明治1回戦 (新治)

東大	000	010	000	1
明大	300	000	00X	3

2回戦 (井手、新治、柳町、安月、元久)

明大	304	300	611	18
東大	000	000	001	1

対法政1回戦 (新治)

東大	000	000	002	2
法大	000	100	20X	3

秋2回戦 (井手、新治)

法大	000	020	045	11
東大	000	000	000	0

東大、11年ぶり法大下す



新治がピシャリ
攻守に気迫、開幕を飾る



エース・新治投手の活躍を伝える記事 (P50 参照 後に大洋へ：東大からプロ入りした第一号) —昭和39年春季リーグ戦—